

子どもの気管支喘息発作時の身体感覚の彩色表現 人型の塗り絵を用いて

真 壁 あさみ

新潟青陵大学看護学科

Representation in Color of Spasms of Bronchial Asthma by Children in the Experiment of Coloring Pictures of the Human Body

Asami Makabe

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

Children's pictures fall into the following groups; those consciously depicted, those unconsciously depicted, and those that characterize their developmental stage. In this experiment, children who had a medical history, especially of spasms of bronchial asthma, were asked to color pictures of the human body to see whether or not there is any matching color for the disease. The previous experiments have noted the connection between the color purple and the disease. In the experiment with sixteen children of five-year-olds to twelve-year-olds with bronchial asthma, however, the use of red in the affected parts was significant.

On the assumption that the result of this experiment is different from other reports because children were directed to paint deliberately, while they were left free in the previous experiments. It can be concluded from this experiment that when children tried to express the negative image of the disease consciously, some turned to visualize their disease according to their defense mechanism, and others symbolized their disease in order to decrease the elements that threaten them.

Key words

Bronchial Asthma by Children , Color Representation , Feeling in the body

要 旨

子どもの絵画表現の中には意識的に描かれるもの、無意識的に描かれるもの、発達により特徴付けられるものなどがある。ここでは子どもが体験した疾病、特に喘息発作を取り上げ、その体験を塗り絵で表してもらおうを試み、その疾病を表すのにふさわしい色があるのかどうかを調査した。これまでの報告では紫が疾病と関係付けられていた。

結果は、気管支喘息の5歳から12歳までの子ども16人の表現を調べたところ、疾患部に使われる色は赤が有意に多かった。

この結果が今までの報告と異なる理由として、指示によって意図的に描かれた絵と自由画との違いということが推測された。気管支喘息に罹患した子どもが意図的に疾病時の体の感覚を描画に表現しようとするとき、描画の発達過程の中で見えるもの、あるいは見えるであろうものを表現しようとし、困難を感じるようである。また、その解決として見えるように服を描きいれたり、記号的な意味を含む赤を多く用いたのではないかと考察された。また、疾病体験の想起やあるいはそれを表現することは不安を呼び起こすことであるのかもしれない。そういう不安から逃れるために子どもは記号化された象徴的な色（気管支喘息の場合は赤）や前述のように服を描きいれて表現を和らげたりする傾向があるのではないかとということが示唆された。

キーワード

小児気管支喘息 彩色表現 身体感覚

・ 研究の目的

近年、臨床心理学、精神医学の領域では絵画、芸術、造形療法などが盛んになり、表現されたものが解釈される機会が多くなってきた。特に子どもは日常的に絵を通して表現することが多く、その内容は多くの場合、大人が言語的に説明するよりももっと的確にその体験を伝える。その表現はどんな要素が組み合わさっているのか。教育学、心理学分野には発達段階における絵画や、心理的な不安の表現の研究が多くある。

この研究では表現されたものを解釈するための一助として子どもの絵画表現の中でも、身体的な疾病体験とその色による表現に注目した。病変を表すのにふさわしい色があるのか、気管支喘息発作を起した子どもの発作時の身体感覚を塗り絵で表現してもらい、どのような色が使われやすいのかを調べ、なぜ使われやすいのか検討した。疾病として気管支喘息を特に選んだ理由としては発作という明らかな体の異変を感じているということ、対象数がある程度見込まれること、発作を起しても治るという体験を繰り返しているため病気に対する不安が他の疾病に比べ少ないのではないかと判断したことがあげられる。

・ 今までの研究

子どもの疾病や症状とその絵画的表現に関しては以下のような報告がある。

疾患や症状のある部位を特定しない全般的な気分の表現に関してはアルシュウラとハトウィックの報告があり、2歳から5歳までの子どもの絵を調査した結果、紫は憂鬱な、不幸な気分と何らかの関係があるとしている¹⁾。

また、部位を特定したのものとして、キューブラー・ロスは生きるために、より強く注意を呼吸に集中するようになった子どもが、自画像に鼻腔を書き入れるようになったことを報告している²⁾。また、浅利は痛みや、風邪、頭痛、咳などがその感覚にふさわしい形と色で表現されるとして特有の形を報告している。例えば痛みは紫の鋭角三角形、風邪は人物の

輪郭線や服に紫を用いる、頭痛は帽子やリボンなど頭につけるものに紫、咳や喉の痛みやかゆみは紫の丸・紫の輪、かゆみに関しては紫の点描、やけどは薄くのっぺりと紫を塗るなどである³⁾。点描に関しては末永も言及しており皮膚疾患やアレルギー、気管支や胃の疾患などを持つ子どもの多くがざらざらとした画用紙にクレパスで描いたり、点描画であらわしたりするなどの絵を描いていることを報告している⁴⁾。

身体的な症状がどのような色で表されるのかという研究に関しては上述の浅利が述べているように圧倒的に紫に関係したものが多⁵⁾い。末永は風邪で鼻をつまらせていた4歳の女の子が描いた鼻が紫色の絵や、気管支喘息の治療中に5歳の女の子が描いた服の色が紫に塗られている絵などを紹介している⁶⁾。岡田も鼻の部分を紫色で描いている場合は鼻がつまりやすい子どもであることが多いことや扁桃腺肥大の6歳の女の子がいつも喉や口のあたりに紫色をつかっていたことを指摘している⁷⁾。

また、末永は、身体的な部位ではないが、阪神大震災のあと、現地の子どもが描いた地面や虹や花が紫に塗られている絵を紹介している⁸⁾。異変があった環境に対しても紫を使用しているのは興味深い。

紫以外の色を疾患や症状と結び付けて報告している例は少ない。久保は子どもが茶色を良く使うことと腹痛とは何か関係があるらしいと示唆している⁹⁾。

これらの報告から子どもの心身のエネルギーの低下や不全感と関係が深いのは紫であるということが言える。

しかし、なぜ紫が使われるのかについての言及は少ない。末永は紫色には赤と青の2色が含まれており、赤の気分を高揚させる効果と青の落ち着きを与えてくれる効果の二つを兼ね備えているのではないかとして、「紫色を好む子どもの心身の働きが停滞しているとすれば子どもの本能が紫色による治療効果を求めようとする無意識の働きではないか」と述べている⁹⁾。

以上のことをふまえ、この研究では気管支喘息発作を起こした子どもがその疾患部位を

どのような色で表すのか調査し、結果について考察したい。

・実施方法

1. 対 象

気管支喘息の発作を起し入院した児のうち、自由に色を選んで塗り絵ができると思われる5歳以上の子どもで、保護者と本人に許可を得られた対象14名（男子13名、女子3名）である。

2. 期 間

2002年9月～2003年9月

3. 使用物品

16色クレパス、塗り絵の用紙（紙面が比較的ざらざらとした八つ切り画用紙にマジックで人型がかかれている）

4. 方 法

入院して発作がおさまった寛解期で、検査、処置などのない自由時間に塗り絵の用紙を2枚用意し、発作のあったときの体の感じを塗り絵で表現してもらう。筆者から症状についての言語化はせず、「どうして入院したの?」「そのときのどんな感じだった?」「そう、

な感じだったの。」などと共感しながら確かめてゆく。言語的な症状の表現があった場合は書き留める。5分経過しても描き始められない場合は中止する。体の前面と背面に分けて描きたい場合には2枚の塗り絵用紙に塗ってもらう。塗り分けや、何色使うか、顔の表情の書き込み、背景については児の要求に応じて自由に描いてもらう。もし、患児が塗り絵のあと自由画を描きたいと希望する場合は予備の画用紙に描いてもらう。

なお16色のクレパスを画材に選んだ理由は紫が入っていること、また画用紙との相互効果でざらざらな感じを表現でき、気管支喘息の子ども（その多くはアトピー性皮膚炎も併せ持っている可能性がある）の作業へのモチベーションを高めるのではないかという効果を狙って選択した。

5. データ処理の方法

16色の中で病変部に何色が使用される頻度が高いのかを調べる。ここで病変部とは首、上半身前部とする。また患児よりそれ以外の部分の症状やその「感じ」が言語的に表現された場合はその部分も病変部に含む（頭痛がした、お腹が気持ち悪かったなど）。顔の描きいれ、髪の毛の描きいれなどのために使われた色は含まない。多くの色が塗られている場合は面積の多い少ないに関わらず1人の子どもが病変部の色として選んだ色という意味で、使った色全部に等分の関心があったものとみなし、1人の子どもが使用した色の数が合計で1となるようにした。ある色が特に頻度が高いかどうか、²検定を行い有意差を調べる。

・結 果

彩色されたものの例を図1に示す。

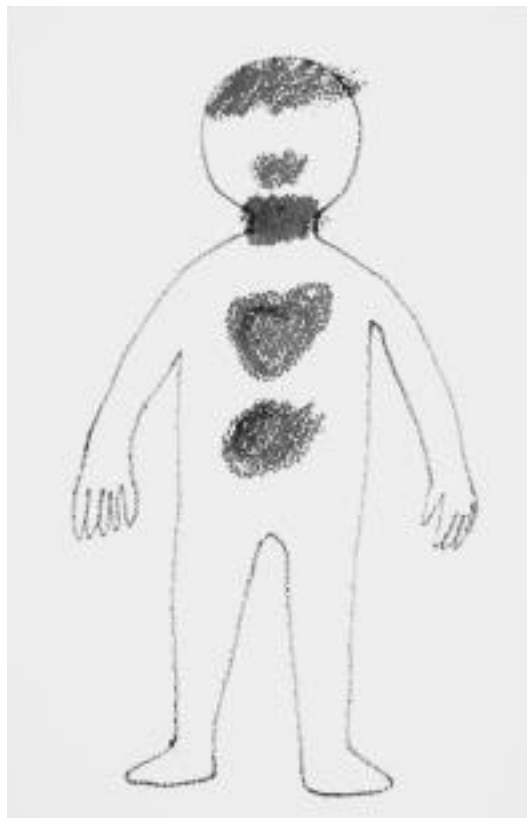


図1 D君（8才）の描画

表1は塗り絵をした結果をまとめたものである。

	性別	年齢	発作	顔	首	胴体	上肢	下肢	服	描画の際の言動
A	男	6	中	顔頂部のみ赤	赤					
B	男	12	中		赤	赤	赤	赤		
C	男	7	中		赤					
D	男	8	中	顔頂部と口が赤	赤	胸と腹赤				
E	男	7	中	オレンジ	青	青	青	オレンジ		苦しいときは喉が熱くなるんだよ。時々ね寒くなるときもある。足も熱くなる。
F	男	8	中			胸青				心臓がね、この辺かな・・バイキン・・できた。心臓が苦しくなるの。
G	男	5	中	目+肌色の線		水色と赤と黄の線	赤と黄の線	水色の線		TV見すぎで目が赤くなってた、ここが黄色くなってなんか出てきた・・血があっただけられた・・そこに黄色いやつが・・それで血が・・足の場所は水溜りが入っていた(右足)。注射やったら何とか血が回っていた。このキカイの入院は大好き。苦しいときは固まった感じ(水色で線を描く)。
H	女	5	中	白	白	白	白	白		車に乗っているときにあめが喉にあるような感じになる。咳が出たり、痰がある感じがする。でもそれは見えないから何色かわかんない。＜好きな色でいいよ＞(全身を白く塗り)明るい色が好き、黄色もいい。
I	男	6	大	顔泣いている		赤	肌色	水色	あり	汗・・昨日は暑かった。泣いているの。喉がぜいぜい・・しゃべれなかった。
J	男	9	中	顔	黄色	上黄色、下青	肌色	緑		難しい・・・。
K	男	9	中	黄色	黄色	黄色	黄色			これかな・・(黄色を揃って考えている)。
L	男	10	中	てっぺん黒、顔		赤	半分赤	青	あり	(ふざけて十字型を描く、その後)そういわれても・・。
M	女	10	中	髪黒、肌色		青と赤の線	青と赤の線	青と赤の線	あり	何でもいいの？(自分の寝衣を実ながら描く)
N	男	9	中	赤	赤	黄色	黄色	黄色		全部一色で塗るんですか？
O	女	5	中	てっぺん赤		緑		肌色		(足のところは自分の足とクレヨン比べて色を塗る)コホンが出た・・。
P	男	7	中		ちょっとだけ赤	白				のどのところぶつぶつができた感じ、あと咳が出た。＜胸のところは？＞なんか白いんだよここかなー、骨があるからなー。

描画の際の言動の表での()内は観察された様子、()内は旅行者の言葉、その他の部分は子どもの発言を表している。

子ども	赤	橙	黄	黄緑	緑	水色	青	紫	桃	肌	黄土	茶	こげ茶	黒	灰	白	計
A	1																1
B	1																1
C	1																1
D	1																1
E			0.5			0.5											1
F						1											1
G	0.33		0.33		0.33												1
H																1	1
I	1																1
J			0.5			0.5											1
K			1														1
L	1																1
M	0.5					0.5											1
N	0.5		0.5														1
O	0.5			0.5													1
P																1	1
計	7.83	0.5	2.33	0	0.5	0.33	2.5	0	0	0	0	0	0	0	0	2	16

表2. 喘息患児の塗り絵における患部の色

	赤	赤以外
使用人数(人)	7.833	8.1667
期待度数	1	15

表3. 赤を使用したかそれ以外の色を使用したかの集計と期待度数

表2は患部にどの色を使用しているかの集計である。表3は赤と赤以外の色を使った子どもの数の集計である。なお、表中の期待度数はクレヨン箱にある16色すべての使用期待度が等しいものとして算出した。²検定の結果、度数の偏りは有意で($\chi^2(1) = 49.8, p < .01$) 赤が有意に使われる傾向があることがわかった。その他の色については有意差はなく、特に使われやすい色ということはいえない。

今回の調査の結果で、気管支喘息の発作を起こし入院後寛解期に入り症状も改善したころの子どもは発作のときの身体感覚を赤を用いて表現する傾向があるということがわかった。

・考 察

前述のようにこれまでの報告では子どもが絵の中で身体の不全感を表すとき、紫が使われやすいということであったが、今回の調査では紫を患部に使用した子どもは一人もいなかった。その差異の原因をどこに求めたらよいか、また赤が使用された理由について考察したい。

1. 意識的な表現か無意識的な表現か

疾患や症状の表現に紫がよく使われるという今までの報告は、疾患について、あるいは症状についてなどと意識して描いたものではなく、自由画（場合によっては別のテーマがあった可能性もある）を解釈したものである。一方筆者がこの度行ったのは身体感覚を指示によって意図的に表現してもらうことであった。Widlocherの深層心理学的表現システム（図2）¹⁰⁾によってこの差異を説明すると無意識的に表出している絵の潜在的意味を解釈するのか、意識的に表出された絵の言葉の意味を解釈するのかの違いであるとも考えられる。心理テストとして用いられる投影法では、施行者の意図がわからないように行われることによって無意識に表出される深部が見えてくる。

実際今回の調査で子どもに色を塗ってもら

う際には「難しい」「見えないからわからない」などの言葉も聞かれ、意識して考えながら色を選んでいる様子が伺えた。色を塗りやすくするという意味で発作時どんな感じがしたかという質問をしたケースもあるので、より、絵の言葉の意味が強調されていると考えられる。今回言語化された自覚症状には、「苦しいときは固まった感じ」、「あめが喉にあるような感じ」、「喉がげいげい...しゃべれなかった」、「コホンが出た...」、「のどのところぶつぶつができた感じ。あと咳が出た」、「苦しいときは頭が熱くなるんだよ...時々ね寒くなるときもある」などがある。このように具体的に言語表現され意識のレベルに上げられているものは、自由画の中で無意識のうちにおのずと表出される身体表現とは比較できないのだと思われる。

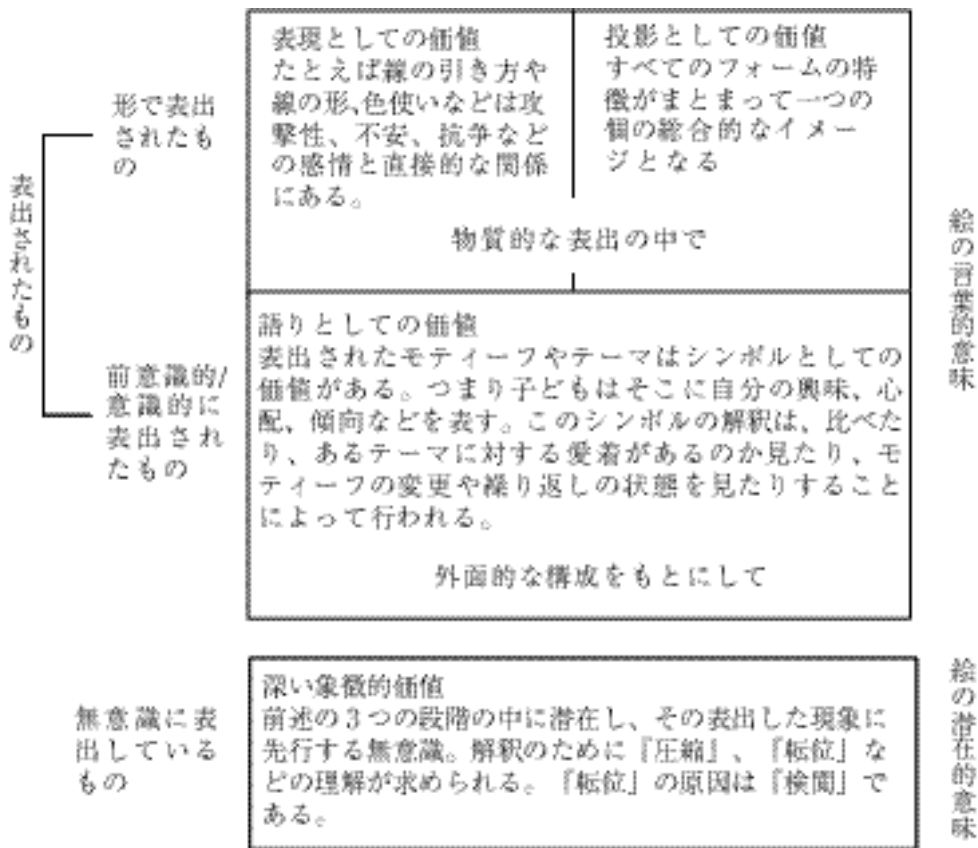


図2. 深層心理学的表現システム (Widlöcher)

2. 子どもの描画原理から

彩色をする際に、はっきりとした躊躇がありなかなかに書き出せなかった子どもは5人で、その年齢は5歳から10歳までであった。「見えないからわからない」(5歳女子)「難しい...」(9歳男子)などの発言のほかに「そういわれても...」と考えていたり、(10歳男子)思ったとおり何でもよいという施行者の言葉をうけて「なんでもいいの?」と確認して現在自分の着ている寝衣の柄を写し取ったり、(10歳女子)「これかな...」としばらくクレパスを握って考えていた様子(9歳男子)が観察された。

一方、あまり躊躇することなく前述のように「苦しいときは頭が熱くなるんだよ...時々ね寒くなるときもある」(7歳男子)「心臓がね、この辺かな...バイキン...」と胸の部分に青で丸く塗る、(8歳男子)あるいは黙々と無言で彩色する様子も見られた。

意図的に身体感覚を表現するという子どもを描画の原理から詳しく見てみたい。

調査の対象となった子どもたちは5歳から12歳までである。子どもの絵の発達という視点からみると5歳ころから8歳ころまでは構成期¹¹⁾、または図式期¹²⁾などといわれ、レントゲン図法、観面混合などが見られ、自分の中に蓄積されていく図式を使いながら絵を構成してゆく時期である。また、9歳ころから11歳頃までは構成期から再現期への移行期¹³⁾、または写実の黎明期¹⁴⁾などといわれ、写実的表現の傾向が出てくる。対象の年齢は幼児期後半から小学校低学年の構成期と小学校上級から中学生の構成期から再現期への移行期といえる。

鬼丸は子どもの絵の造形の原理として一般に言われている「見るものを描くのではなく知っているものを描く」という理論に対し、アルンハイムの「見るものを描く」という理論を前提に触覚性と視覚性の両方の要素が混在し2歳ころまでの表出期には全身的感觉が、それ以降は触覚性が優位であるが成長と共に視覚性の参与が多くなるとする理論を展開している¹⁵⁾。これはなぜ頭足人が描かれるのかという描画原理の問題に対しての鬼丸の答えであり、子どもの絵全般に適応できる概

念である。前述したようにこの調査の対象となったのは構成期と構成期から再現期への移行期にある子供たちで、触覚性と視覚性の両方が表現に参与している。では、目に見えない感覚を描くときにもこのような原理が働いているのであろうか。体の中をのぞくことができれば「見えるであろうと思ったこと」をあまり躊躇せずに描いた絵(図3)を見てみると血管を思わせるような線が描いてあり、どのようなことが体の中で起こったのか説明しながら書いている。これは点滴をして液体が自分の中を流れていくという体験の表現でもあるし、以前に人体の解剖などに関する絵を見るなどの情報を得ていたとすれば知っていたことかもしれない。体験したことと知っていることが合わさってこのように表現されたのだと考えられるが表現としては体の中が「見えたとしたら」という表現になっている。また「見えないからわからない」という発言に見られるように、この場合は「視覚」に基づいたものが前提となっている。このような立場にたって描画を見てみると、服を書き入れて彩色をした例(図4)は実際には体の中にあって見えないものを「見えるようにする」ために行ったとも考えられる。

今回の調査では赤が有意に多く使われていた。この理由は何であろうか。

赤の象徴的意味として香川らは「赤は火の色であり、血の色であり、また花の色でもある。そのアナロジーから、赤は生命力・活動力の象徴となる。...このような意味では赤は活動・健康・外向性の象徴であるが、それが強く、乱れたストロークで使われるときは、激しい自己主張・興奮・不満・怒り・狂気などの象徴となる¹⁶⁾」と述べている。

気管支喘息は気道の閉塞・狭窄、気道の炎症、気道の反応性の亢進または気管支平滑筋の痙攣によっておこる肺の疾患である。赤という色に直接結びつく症状に気道の炎症があげられる。炎症の3徴として発熱、発赤、疼痛があり、その中の発熱と発赤に関しては容易に赤という色と結びつけて考えられる。その炎症状態は体の中なので子どもは見ることができない。しかし、経験的に炎症状態を皮膚などで見たことと内部に起こっている感じ

を類似のものあるいは同様のものとして捉え、赤として表している可能性もある。また、一般に熱や熱い感じを赤で表すことは日常的になされている。「暑かった」という言葉とともに赤を塗ることが観察されたが、商業的にも薬のパッケージやテレビのコマーシャルで発熱の様子を表すときにはこの色が使われ、半ば記号的な意味を持っているといっただろう。自分のオリジナルな感覚によるものか、あるいはこうした記号的な意味からなのかの判断はできないが、その両方が混ざり合って赤という色に結びついたと推測できる。

意識的に身体感覚を描画に表すということは、ある子どもにとっては難しいことであ

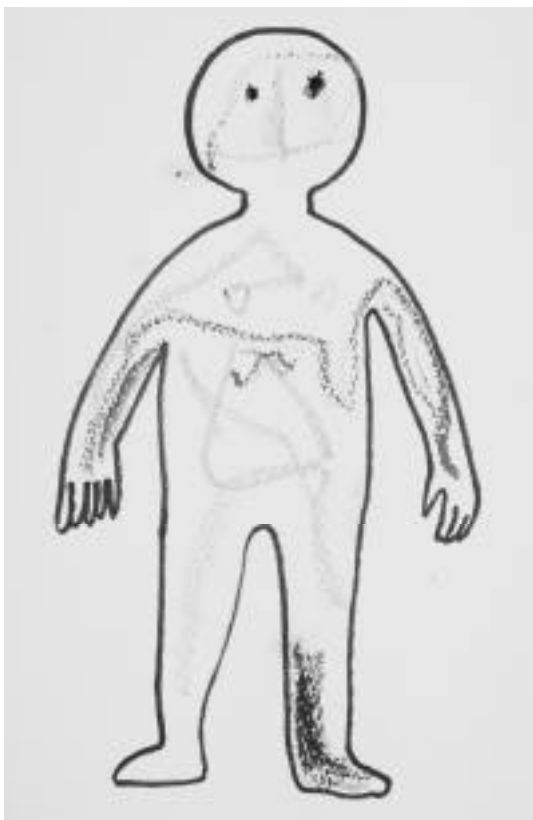


図3 G君(5才)の描画

描画中の言動：TV見すぎで目が赤くなった。

ここが黄色くなってなんか出てきた...血があつてどけられた...そこに黄色いやつが...それで血が...足の場所は水溜りが入っていた。注射やったら何とか血が回っていた。このキカイの入院は大好き。苦しいときは固まった感じ(水色で線を描く)。

[()内は筆者の観察]

たが、その理由の一つとして身体感覚が「見えない」ことがあげられる。敢えて描こうという努力として 1. その感覚のもととなっている体の状態を視覚的に捉えて表現したり 2. 服を描き入れるなど見える状態に変化させるなどのことが観察された。

また、感覚を色で捉えることができた場合は 3. 自分の感覚と記号的な意味が重なって赤として表現されることが多く観察されたのではないだろうか。

3. 防衛という観点から

前項で記号的な意味として用いられた可能性のある「赤」について述べたが、心理的な側面から考えると、自分の中に起こった病変について意識的に描くという事は自己を脅かすものであったのかもしれない。記号として書きこむことはそれに対する防衛とも考えられる。この防衛という問題に関連して、もうひとつ観察されたことは、人型の中に色を塗る際に服の色として塗った例が3例あった。あらかじめ袖の区切り線、ズボンの裾の区切り線を入れて彩色している(図4)。

フロイトA. は正常心理学の領域に属する、外界からの影響に直接抵抗する防衛について「幼児の自我は好ましくない事実を否認することによって現実を逃れるが、一方、現実を検討する能力も備えており、観念や空想の世界だけではなく、行動によってもこの力を発揮する¹⁹⁾」と述べている。

子どもが意識的に喘息発作時のことを想起し表現するとき中にはその不安から逃れるために記号化された色や服の描きこみを使って現実を安全なものとしているのかもしれない。気管支喘息という疾病の症状である炎症という特徴から今回の調査では赤が有意に多く使われていたが、症状が異なれば、また違う色が記号として用いられる可能性もある。



図4 I君(6才)の描画

まとめ

気管支喘息に罹患した子どもが意図的に疾病時の体の感覚を描画に表現しようとするとき、描画の発達過程の中で見えるもの、あるいは見えるであろうものを表現しようとし、困難を感じるようである。また、その解決として見えるように服を描きいれたり、記号的な意味を含む赤を多く用いたのではないかと考察された。また、疾病体験の想起やあるいはそれを表現することは不安を呼び起こすことであるのかもしれない。そういう不安から逃れるために子どもは記号化された象徴的な色(気管支喘息の場合は赤)や前述のように服を描きいれて表現を和らげたりする傾向があるのではないかとということが示唆された。子どもの描画原理に関してはまだ、論争が続いている²⁰⁾。物理的に目に見えないものを描くとき子どもは何を描くのかという調査も子どもの描画原理解明の一助になると思われる。

引用文献

- 1 アルシューラ, ハトウィック; 島崎清海 訳. 子どもの絵と性格. 東京: 文化書房博文社; 2002. p.90.
- 2 キューブラーロスE. 死ぬ瞬間の子供たち. 東京: 読売新聞社; 1982. p.135-8.
- 3 浅利 篤. 子どもの絵診断事典. 黎明書房; 1990. p.37.
- 4 末永蒼生. 答えは子どもの絵の中に. 東京: 講談社; 2000. p.72-3.
- 5 末永蒼生. 答えは子どもの絵の中に. 東京: 講談社; 2000. p.19.
- 6 岡田徹, 五島秀明, 河村光泰. 子供たちからの赤信号. 中央法規; 1997. p.113-4.
- 7 末永蒼生. 答えは子どもの絵の中に. 東京: 講談社; 2000. p.18.
- 8 久保貞次郎. 色彩の心理 子どもの絵の心理的記録. 文化書房博文社; 1999. p.83-4.
- 9 末永蒼生. 答えは子どもの絵の中に. 東京: 講談社; 2000. p.19.
- 10 Widlocher, D. Was eine Kinderzeichnung verrät. München: 1973.
- 11 鬼丸吉弘. 児童画のロゴス 身体性と視覚. 東京: 勁草書房. 1995. p.47-64.
- 12 東山明, 東山直実. 子どもの絵. 大阪: 保育社. 1996. p.104.
- 13 鬼丸吉弘. 児童画のロゴス 身体性と視覚. 東京: 勁草書房. 1995. p.47-64.
- 14 東山明, 東山直実. 子どもの絵. 大阪: 保育社. 1996. p.104.
- 15 鬼丸吉弘. 児童画のロゴス 身体性と視覚. 東京: 勁草書房. 1995. p.47-64.
- 16 香川勇, 長谷川望. 子どもの絵が訴えるものとその意味. 黎明書房. 1998. p.67-8.
- 17 近江源太郎. 色彩感覚. 日本色研事業株式会社. 2000. p.14-5.
- 18 小町谷朝生, 吉田豊太郎 監修. カラーコーディネーションの実際 商品色彩. 東京商工会議所. 2003. p.20-2.
- 19 フロイトA. 黒丸清志, 中野良平訳. 自我と防衛機制 アンナ・フロイト著作集第2巻. 岩崎学術出版社. 1981. p.67
- 20 高橋敏之. 幼児の頭足人的表現形式の理論的説明における主知的見解とG.H.Luquetの描画発達説. 大学美術教育学会誌. 2000(33): 215-21